
Aioon

市松ここあ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A i o o n

【Nコード】

N 6 8 9 4 E

【作者名】

市松ここあ

【あらすじ】

僕は今、人間として生きている。だからあなたにも、未来の僕にも、人間として生きていてほしい。「永遠」なんていらなから。

未来の僕へ（前書き）

タイトルの「A i o o n」はギリシャ語で「永遠の」という意味です。

未来の僕へ

未来の僕へ 僕より

未来の「今」は、どうですか？ こちらはとても暑いです。兜の中はとてもむしむししていて、戦が終わると、髪の毛は風呂の後のようにびっしょりです。

僕の「友達」は、どうですか？ みんな僕よりうんと大人っぽくなっています。ひげも生えてきたし、至るところの筋肉が鍛えられて、僕の細い腕とは大違いです。

未来の「僕」は、どうですか？ お変わりありませんか？ 髪の毛は銀色ですか？ ひげは生えませんか？ 細い腕のままでるか？

僕はみんなと違うのでしょうか。いつから違^{たが}ってしまったのでしょうか。それがわかったら、お返事をいただけませんか？

もう一つ、僕の父上と母上は、見つかりましたか？ それも是非、お返事で伺いたいものです。

未来の僕へ。僕はどうかやら人とは違ったものらしいです。でもそれは確定したわけではなく、僕は今、人間として生きています。

あなたが人のまま、普通の人間のまま、誰かに愛されていたなら、僕はきつと幸せです。そんなあなたと会えたら、感動に身を任せ、大粒の涙を流すでしょう。僕は思いつきり泣いたことがあります。ひとしきり泣いてみたいものです。

あなたが、大人になっていることを、心から願います。

追伸 戦はまだまだ続きそうです。

人の血を浴びて、今、自分がここに存在^いすると実感するようになったのは、いつからだろうか。それほど最近のことでもないし、ずいぶん昔のことでもない。

ぬつとりと重くまとわりついて、生ぬるい。確かに赤黒いそれは、先程まで目の前に横たわるソレの中を、ぐるぐると廻^{まわ}っていたもの。自分の中にもそれが流れていると思うと、とても心地がいい。血の海の中、一人でぼつりと立っているのもいい。服に洗い落とせないほど染みて、そのまま身ごと真っ赤になるのもいい。

気持ち悪い、汚いと嫌う奴等の方がずっと多いが、理解してもらおうとは思っていない。僕は僕でいたいからだ。誰かの干渉によって、己が他人に作られていった人間を、何度も見た。僕はそうなりたくない。僕は僕の手で作り上げていきたい。極力他人の干渉をなくしたい。後が怖い。

だから、相手のことも理解しようとは思わない。その方がきつと幸せだと思う。相手が変わるのを望むのなら話は別だが。

ぽつと、鼻先に雫が落ちてきた。それを人差し指ですくい取ったのを合図に、空は桶をひっくり返した。梅雨のこの時季に、戦などを起こしたのは誰だ、と、重たく低い空を睨^{にら}んでやる。空は何も悪くないが、僕はたまにこうして、八つ当たりをする。ちつぽけな僕のちつぽけな八つ当たりなど、世界をぐるりと包む空にとっては、ほんの些細なことだろう。この理不尽な視線も、いつの間にかすっぽり、まるでオブラートのように包み、飲み込んでしまう。余韻も残らない。僕が多少すつきりするだけだ。

「輝矢^{ヒイサ}」

後ろから女の声。まだどこか幼い。僕は空から目を離すと、声の方

向へと振り返った。僕と同じ、返り血を全身に浴びた少女が、後ろにすらつと立っている。何事もなかったように、僕の名前を読んで黙り込んでいる。

ああ。返事を待っているのか。

「何？」

そう答えると、彼女はうつすらと微笑んでようやく唇を動かした。

「今日は、どうだった？」

どうだったという質問は、一番答えるのが面倒だと思う。選択肢がいっぱいありすぎて、どれから答えていいのか、悩む。せめて、調子は悪かった？ 良かった？ と、二択か三択ぐらいにしばらくしてくれたら、ありがたいのだが。

「いつも通り。敵将はすぐ討ち取れた。太刀筋も読みやすかったし、何より大振りだったから、隙だらけだった」

「そう」

彼女は睫毛を、一秒弱ぐらいだろうが、伏せると、見慣れた紙と筆を取り出す。

「報告」

「え？」

知っているはずなのに、なぜか彼女の質問が理解できなくて、思わず聞きなおす。呆れたようにため息を漏らした。

「殺^やった人数」

毎度毎度面倒だ。討ち取った人数を調べて、相手の勢力を簡易計算する、というのはまあ理解は出来るが、それは長期戦になった時に有効であって、今日のようなすぐに終わってしまう戦などには、効果を示さない。今回はすっかり忘れていたから、全く数えていない。「えっと…百、ぐらい」

いちいち数えてなんかいなかった。

「了解」

そう言つと、さらさらと記述した。大体の数でも良かったらしい。今までの苦労はなんだったのだろう。

「^{ソラ}塑空は？」

「九〇」

「あれ、いつもより少ないね。不調？」

「あなたがほとんど仕留めちゃったからでしょう？」

顔が赤くなった。怒ってしまったのだろうか。だが、「それもあるけど」と付け足すと、またうつすら微笑んで、

「丁度今日で九〇歳なの。記念に、と思っただけ」

誕生日だなんて、君にあったのか。そう言いたかったが、口の中に押し込めた。同じ人間に言われたくないだろう。僕だって誕生日なんかない。でもふと思うときがある。今、何歳になったのだろうか。少しは、八九の自分より変わっただろうか。結局は変わっていないのだろう。自分にはわからない。人に見てもらわなければならないと思う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6894e/>

Aioon

2010年12月17日15時14分発行